

根付研究 最前線「天正期から慶長期前期(1573年～1600年頃)がエポック?!」

これまでに吟味してきた 15 世紀中頃までに描かれた風俗図から、堤物の担い手は、生業に移動を伴う者や武士といった町に定住する庶民からすれば「非」日常を送る者たちでした。彼らは堤物を左腰に佩用し、これを帯に直接または腰刀にからけて使用していました。勿論、堤物を帯に吊るすための留具（小器具）は確認できません。しかし、こうした佩用の有様に、ある時期から劇的な変化が起こります。それを如実に表しているのが、市井の鼓動響き渡る『洛中洛外図 福岡市立博物館蔵』に描かれた快活な庶民の姿です。ここでは、これまでのように袋物を左腰に佩用する庶民の姿が描かれる一方で、袋物を右腰に佩用する風流踊りや客引きをする町衆（女性）らの姿も描かれています。確かに、佩用位置は、担い手の好みや、風俗図が描かれた時期特有の有様の反映との説明も可能でしょう。しかし、この風俗図が描かれて以降、とりわけ『花下群舞図 神戸市立博物館蔵』が雄弁に物語るように、担い手が堤物を右腰に佩用することが、あたかも一つの流行のように描かれていきます*。畢竟、風俗図に描かれた人物の比較からは、『洛中洛外図 福岡市立博物館蔵』が描かれた慶長期（1596～1615）中期以前、つまり天正期（1573～1592）から慶長期前期頃にかけて、堤物に対する担い手のまなざしに変化が起こったと考えられます。

これは、先に取り上げた『洛中洛外図屏風 舟木家旧蔵本』にも同じ状況が見受けられます。加えて、右腰への佩用という新たなスタイルが、これまでとは異なる何らかのメッセージ性を担い手に付与しながら、広く受け入れられていったことも想像に難くありません。それでは、堤物と佩用のスタイルへのまなざしの変化はどのようにして起こったのでしょうか。そもそも堤物への認識の変化など起こるのでしょうか。堤物は実用に供しさえすればよい単なる容器ではないのでしょうか。こうした諸々の疑問に対し、筆者は、『洛中洛外図 福岡市立博物館蔵』に描かれた扇屋の壁に掛けられた扇絵に一条の光線を見ます*。交差する堤物と扇、これはまた次号以降で。



◇『洛中洛外図』福岡市立博物館、六曲一双、慶長期前半頃成立、『花下のモード』京都国立博物館、平成11年
*筆者の調査内容も反映しています。
◇『花下遊楽図（花下群舞図）』神戸市立博物館、六曲一双、慶長期末期成立、『近世風俗図譜』第二巻 小学館昭和57年
*作者不明『邸内遊楽図』東京国立博物館蔵／江戸時代_17世紀／画像番号 C0059486 / 陳列番号 A_1303 / 東京国立博物館研究情報アーカイブス (tnm.jp) https://webarchives.tnm.jp / 堤物の佩用が分かるよう画像の一部に手を加えた。
*重要文化財 洛中洛外図屏風 - 狩野孝信 - Google Arts & Culture

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員 大西 弘祐 (忠雲)

作家の視点『栗田 元正』

象牙彫刻において最年少で数々の受賞歴を持ち、その確かな技術を根付制作に活かしています。古典と現代の融合を目指す元正氏は「古典を重んじて、そこから新しいものを発信していきたい」と語ります。近年は伝統的な花鳥風月にとどまらず、人物にも挑戦するなど幅広い題材に取り組む元正氏に根付の魅力をお聞きしました。

まずはこの度のゴールデン根付アワード・グランプリの受賞おめでとうございます。受賞作の「腕守り」(本誌中面掲載)は古典的な雰囲気を持ち合わせつつ、新しさも感じさせますが、制作で意識していることを教えてください。

私は古典的な題材が好きなこと、根付が最も美しく映えるのは和装で身に着けた時だと考え、それに合うような古典や自然をテーマにしながら作品が纏う雰囲気を大切にしています。「腕守り」は小唄の一曲なのですが、作品作りと並行して様々な古典芸能（茶道、華道、邦楽など）を幅広く学び、小唄に唄われた粋な空気感と淡い抒情性を与えられたらと思って制作しました。

「風柳(ふうりゅう)」
高2.5cm



根付は本来使われて魅力が増すものですが、元正氏にとって根付の魅力とはどのようなものですか。

根付は飾りだけの置物ではなく実際に使用するものであり、大きさや形状が制限された中で多様な技術を用いることで生まれる「用の美」に加え、また使うことで表面が摩耗して「なれ」の味わいが増します。新作であっても愛情をもって使い込まれたような味わいや手触りを大切にしています。古典の持つ風合いと現代的な感覚の表現を目指し「新古典主義」と呼んでいます。

栗田 元正 (くりた もとまさ)



剥製師である父と牙角を扱う家業の影響から幼少から根付に親しむ。当初の写実的な作風から、鑑賞者の視線に触れる抒情的境地を開拓している。深い彫りと丁寧な仕上げで定評がある。主に鹿角、象牙を使用している。

2023年 1月～3月の特別企画展のご案内 **人のいとなみに寄り添う根付**

1月「根付の神様」展 ■ 1月6日(金)～31日(火)	2月「根付の食卓」展 ■ 2月1日(水)～28日(火)	3月「根付歳時記」展 ■ 3月1日(水)～31日(金)
--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter、Instagramにて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞 (奈良県大和郡山市より授与) 家庭画報(目次頁)に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

公式サイトはこちらから▶

コロナウイルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- ・入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします(37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせていただきます)。
- ・万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- ・マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。



佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。



AUTUMN ~ WINTER Issue. 10

- [目次]
- 企画展の見所
 - 根付研究最前線
 - 作家の視点

[発行元]
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生
賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内

未来へ受け継ぐ日本の誇り『根付文化の躍動』展

京都 清宗根付館は 2007年に開館して以来、現代根付を専門とした収集と公開、啓蒙に努めてきました。一概に根付といっても各時代の世相や流行に合わせて根付の題材や表現も変化してきました。根付は江戸時代から続く伝統の上に継承されてきましたが、時代ごとの新しい工芸技術をダイナミックに採り入れながら発展してきた躍動的な歴史をもちます。また現代の多層化された社会における複雑な価値観を反映させながらも、未来を模索する文化的な胎動を看取することができます。作家の個性や独自の表現が求められる現代において、今を生きる私たちが葛藤し挑戦しようとする文化の躍動が感じられる作品をご覧ください。

10月は「躍動する根付」展と題して、動かない彫刻に対して如何に躍動感を持たせるかという命題に作家たちが造形的な工夫を凝らして取り組んだ最新作を展示します。
11月は「秋の名品」展と題して、当館が現代根付作家の自由な表現や新しい発想を奨励する目的で現代作家の新作根付から総合的に優れた作品に与えられるゴールデン根付アワード受賞作とノミネート作品を一堂に展示いたします。作家の葛藤と挑戦が込められた作品を俯瞰しながら現代の息吹を伝えます。
12月は年わすれ「酒にまつわる根付」展と題して、この一年の労苦を酒の妙味がねぎらい、新年を新たな気持ちで迎えられる作品を集めました。

十月の企画展
「躍動する根付」展
惹きこまれる表現力。
10月1日(土)～30日(日)

十一月の企画展
「秋の名品」展
栄光はさらなる高みへー躍動と進展。
11月1日(火)～30日(水)

十二月の企画展
「酒にまつわる根付」展
一年の労苦が醸す味。人が人に惚れる味。
12月1日(木)～28日(水)

根付文化の躍動展
Exhibition in October Dynamism
Exhibition in November Autumn Masterpieces
Exhibition in December Netsuke about Sake

公益財団法人 京都 清宗根付館
KYŌTO SEISHU NETSUKE ART MUSEUM
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地(壬生寺東側) 電話: 075-802-7000

年報は、2023年1月6日(金)より開館いたします。

告知ポスター

10月 惹きこまれる表現力。
■10月1日(土)～30日(日)

「躍動する根付」展

根付の醍醐味は生き生きとした描写にあります。それは小彫刻でありながらも造形的な工夫によって大きく見せたり、動いているように見せたりすることができるためです。体躯の正中線を意図的に湾曲させ、凝縮させることで、躍動感(動勢)を生み出します。動かない彫刻でありながら、生命感や躍動感を感じさせるのは根付の特徴です。江戸時代の名工から引き継がれた美学が今でも継承され、現代作家によって最新作にも採り入れられています。また時代の変化を新しい視点から風刺して見せたりするなど、作家たちが捉えた躍動感あふれる根付をぜひご覧ください。



立原 寛玉 (1944～)
「赴任ス西へ」 高3.9cm
象牙

西方守護を司る白虎の猛々しい姿。接地面を少なくして、体を反らせ顔を上げて勢いを演出。



森 哲郎 (1960～)
「守護神」 高4.5cm
黄楊

困難に立ち向かう際に守護神の存在は心強い。毘沙門天と勇猛な虎にその加護を託して。



平賀 胤壽 (1947～)
「蝶やく」 高5.5cm
象牙・べっ甲

蝶の化身が飛び立とうとする瞬間。手を挙げた童子に健やかな成長を込め人生の跳躍を願う。



宮澤 彩 (1949～)
「シャチ」 高3.0cm
象牙

シャチの曲芸は水族館の花形。大きくのけ反らせることでダイナミックな動きを与えている。



宮崎 輝生 (1936～)
「鏡獅子」 高3.8cm
乾漆

芝山象嵌の第一人者による作品。斜め上から奥行きを強調し飛び上がった一瞬を表現。

11月 栄光はさらなる高みへ! 躍動と進展。
■11月1日(火)～30日(水)

ゴールデン根付アワード※「秋の名品」展

根付が江戸時代初期に発祥して以来、約4世紀にわたって受け継がれた伝統と、現在を生きる作家が探究する「革新」は常にせめぎ合いながら作品を深化させています。伝統を継承することは作り手と担い手が協働することで文化を発展させることでもあります。日本で生まれた根付は今では世界のNETSUKEとして広がりを見せています。

当館では現代作家による自由で新たな挑戦を奨励する THE GOLDEN NETSUKE AWARDS※を設けて表彰しています。本年度の受賞作とノミネート作品を一堂に展示します。

※当館で展示された新作根付の中から総合的に優れた技術や発想を持つ作品に与えられる賞。



THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

及川 空観 (1968～)
「一騎当千 巴御前」 高5.3cm
象牙

千人力の武勲で名高い女武者随一の「巴御前」。躍動感あふれる勇姿をまとめている。



THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

栗田 元正 (1976～)
「腕守り」 高6.4cm
象牙

屋根船遊びに興じる柳橋芸者の艶姿を唄った小唄に取材した作品。幸せを願う腕守り。



優秀賞

加賀美 光訓 (1959～)
「三種の神器 良き時代」 高4.6cm
黄楊・べっ甲・アルミ

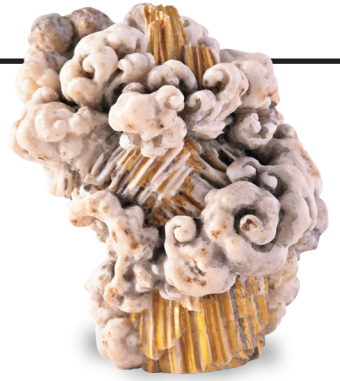
昭和の高度成長期の活気あふれる思い出をノスタルジックな作風で表現している。



優秀賞

田神 十志 (1957～)
「一条の光」 高4.1cm
黄楊

古事記にある大国主命(オオクニスミノミコト)の物語で幾多の試練を乗り越える場面。



理事長賞

佐々木 明美 (1959～)
「止まない嵐はない」 高4.8cm
鹿角

暴風、豪雨、落雷、自然の猛威に打ちのめされても、人々は耐えて乗り越えていく。

12月 一年の労苦が醸す味。人が人に惚れる味。
■12月1日(木)～29日(木)

年わすれ「酒にまつわる根付」展

今回は酒という馴染み深い文化の一端を取り上げ、日本の風土に育まれた文化を醸し出します。酒の起源は有史以前に遡るとされますが、古事記でもスサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する際に「八塩折之酒(やしおりのさけ)」が登場しています。神に捧げる呪術的な酒から、疲労を回復させる「百薬の長」「命の水」、コミュニケーションの円滑化「花見酒」、祝い事、邪気払いなどに欠かせない酒にまつわる根付を紹介します。年わすれの風習はもともと鎌倉時代の貴族や武家が連歌を詠みあう行事から始まり、江戸時代には庶民が酒を酌み交わし現在のよう宴会になったとされます。



池田 朝重 (1972～)
「古酒や蛙飛び込む酒の音」 高3.8cm
黄楊・漆

誰もが知る芭蕉の俳句の「池」を「酒」に変えた作品。年わすれの無礼講で憂さも酒に流す。



高木 喜峰 (1957～)
「花見酒」 高3.3cm
象牙・琥珀

象牙でできた萩焼のぐい飲みに並々と注がれた酒(琥珀)。浮かぶ花びらに風情が漂う。



野垣内 秀也 (1971～)
「煩惱」 高4.8cm
黄楊・鮑貝・黒檀

煩惱は生きている証しなのかと哲学的な妄想を「命の水」でもある酒に託してみる。



駒田 柳之 (1934～)
「花魁」 高5.6cm
象牙

吉原の最上格である花魁(おいらん)は庶民にとって高嶺の花。一年の最後には一献を交えてみたい。



佐田 澄 (1944～)
「乱れてけさは」 幅4.2cm
象牙

百人一首の「…黒髪のみだれて今朝はものをこそ思へ」から。逢瀬の余韻に物思いが混じる。